1968年の工場寄宿舎

――富岡製糸場の事例――

榎　一　江

目　次

はじめに
1　寄宿舎生活をめぐる論点
2　片倉工業における製糸事業の展開
3　1968年の寄宿舎生活
おわりに

はじめに

群馬県富岡市に位置する富岡製糸場は，1872年に開業した官営富岡製糸所を起源とし，民間に払い下げられたのちいくつかの経営を経て1939年に片倉製糸紡績の富岡製糸所となり，87年に操業を停止した[1)]。片倉の製糸事業は，1873年に片倉市助が長野県諏訪郡川岸村（現岡谷市）で10人取の座繰製糸を開始したことに始まる。1878年には初代片倉兼太郎が器械製糸の垣外製糸場を開設し，製糸事業の発展に伴い，95年に片倉組を設立した。これを継承して1920年に片倉製糸紡績株式会社が設立され，全国に多

1）　115年にわたる富岡製糸場の経営は，大きく官営期（1872-92年），三井・原期（1893-1938年），片倉期（1939-87年）に分けられる。その名称は，片倉期にあっても，「富岡製糸所」から「富岡工場」へと変化するが，本稿では富岡製糸場で統一する。

くの工場を展開するなかで富岡製糸場を合併したのである[2)]。同社は，1943年に片倉工業株式会社へと社名を変更し，製糸以外にも進出するが，日本製糸業のトップ企業であり続け，製糸業としては「世界最大のメーカー」でもあった。本稿は，片倉の経営下にあった1960年代後半における富岡製糸場の「寮管理日誌」を分析する[3)]。

近年，富岡製糸場に関する研究が進んでいる。『富岡製糸場総合研究センター報告書』は，一次資料を活用した基礎的分析を進め，女性労働に焦点を当てた『富岡製糸場女性労働環境等研究委員会報告書』も出された。そうした先行研究をもとに，富岡製糸場における寄宿舎の変遷を確認しておこう。

官営富岡製糸場は，1872年の開業時に寄宿舎を用意した。これは，日本における近代的な工場附属寄宿舎の嚆矢で，工場制度と製糸技術の伝播を目的とする富岡製糸場では，全国から多くの伝習工女を受け入れるため，寄宿舎を設けた。官営富岡製糸場が1893年に三井に払い下げられたのち，老朽化した寄宿舎を解体して1896年に新築した木造二階建ての寄宿舎が，鏑寮とされる[4)]。1902年に原合名会社に経営が移ったのち，1918年に榛名寮，1923年に南寮等が増築された。1939年に片倉製糸紡績株式会社に合併

2）　片倉の経営については，松村（1992）。1937年には62工場，13の蚕種製造所その他の事業所を有する巨大製糸経営となっていた。

3）　富岡製糸場は操業停止後も片倉工業の管理下にあったが，富岡市に移管され，2014年には「富岡製糸場と絹産業遺産群」が世界遺産に登録された。そのため，同社「寮管理日誌」は，富岡製糸場保管資料（未公開）となっている。筆者は，富岡市が設置した富岡製糸場女性労働環境等研究委員会（2018年８月～2020年３月）の委員としてこの資料に接した。資料収集にご協力いただいた関係者に記して感謝する。本稿は，富岡製糸場を事例として女性労働環境の長期的な変遷を明らかにする作業の一環である。

4）　寄宿舎の変遷と鏑寮跡の調査については腰塚（2017）参照。

されると，翌1940年に浅間寮と妙義寮が新築された。この２棟は木造２階建て北側片廊下式で，１室15畳（定員10名）で16室ずつ用意された。このうち，1960年代後半に女子寮として利用されていたのは，鏑寮，榛名寮，浅間寮，妙義寮であった。

この長い歴史を持つ工場寄宿舎において寄宿舎生活はどのように営まれていたのであろうか。本稿は，「寮管理日誌」の分析から寄宿舎生活を再構成する。今回首長館から「発見」された「寮管理日誌」は，1965年５月３日から1969年12月27日までの12冊ある。このうち，主たる分析対象を1968年１月から12月にかけて記録されたものとする。1968年に焦点を当てるのは，断片的に残された資料の中で年間を通して記述されているのがこの年のみであったという資料的制約のためばかりではない。「1968年」は，各国で若者を中心とする社会運動が頂点に達し，それに伴う対抗文化が創出された時期を象徴的に示すものとして，歴史的分析の対象となっているからである[5)]。日本でも，1968年から69年にかけて全共闘運動が展開され，反戦市民運動，公害反対運動，多様な住民運動が盛り上がりを見せた。このような時代に，工場寄宿舎ではどのような生活が営まれていたのだろうか。1960年代の工場寄宿舎を検討するにあたって，まずは，製糸労働者と寄宿舎制度をめぐる議論を整理し，第二次世界大戦後の製糸業と寄宿舎民主化運動の展開を踏まえ，1968年の寄宿舎生活について考察を深めることにしよう。

5） とりわけ50年を経た2018年には，様々な著作が刊行されたり，展示企画が開催されたりした。例えば，国立歴史民俗博物館は「1968年―無数の問いの噴出の時代」をテーマに企画展示を行い，多くの観覧者を集めた。また，労働史研究機関国際協会（IALHI）の第49回ミラノ大会のテーマは，「68年の資料」であった。榎（2019a）100頁。

1　寄宿舎生活をめぐる論点

(1)　寄宿舎制度再考

隅谷三喜男は，日本賃労働史論において，主に繊維産業で発達した寄宿舎制度の本質をその「拘置性」に求めた[6)]。寄宿制は，工場規模の拡大に伴って必然化する労働力の不足の問題に対し，遠隔地募集を可能にし，徹夜業や交代制の実施にも重要な意味を持った。加えて，他経営からの職工争奪を防ぐためにも「拘置性」としての寄宿制が経営に意識されるようになり，明治後期に寄宿舎制度が確立するという。その後，寄宿舎は社会状況の変化に伴い福利施設的性格を有するようになるが，その本質は変わらないとした。

しかしながら，近年の研究は，寄宿舎制度の果たした労務管理上の役割を評価する。清川雪彦は，本格的な寄宿舎制度を持たなかったイタリアやフランス，あるいは中国やインドなどの製糸業と比較して，日本製糸業の寄宿舎制度が集団統制の強い日本的な，労働強化的労務管理体制を生み出す基盤となったことを指摘した[7)]。寄宿舎制度が厳格な時間管理や早朝からの長時間労働を可能にするだけでなく，集団規律訓練の場や企業への帰属意識形成の場，あるいは夜間補習教育の場として機能する点に注目したのである。同様に，寄宿舎制度が果たした企業内教育の場としての機能に注目する研究は，日本の寄宿舎制度が女子工場労働者以外にも人材育成に有効に機能したことを示している[8)]。

もっとも，寄宿舎制度は日本のみに見られたものではない。工業化の初

---

6)　隅谷（1975）206頁。

7)　清川（1989）。

8)　藤村・山路（2005）によれば，貿易商社兼松では，1919年に寄宿舎を設け，夜学講習を実施することによって人材育成を実現したという。

期に大規模な紡績工場や織物工場で寄宿舎を設けた例は，欧米にも多数ある。例えば，官営富岡製糸場の設立を指導したフランソワ・ポール・ブリュナの出身地であるフランス南東部においても，19世紀に寄宿制工場の発展が見られた。ただし，フランス絹業における寄宿制工場は1890年にかけて増加したものの，20世紀に入り，事業規模が縮小し始めるとともに衰退した[9)]。同様に，よく知られているアメリカのマサチューセッツ州ローウェルで形成された綿織物工場群における寄宿舎も農村出身の未婚女性を収容したが，19世紀末には歴史的使命を終えた[10)]。1840年以降，移民家族用へと寄宿舎の利用目的が変わり，19世紀末には売却や転用され，家父長制的雰囲気も消滅したという[11)]。

一方，日本においては，農村出身の未婚女性が寄宿舎のある工場で働き続け，20世紀以降にも繊維産業の発展とともに寄宿舎制度が普及し，福利厚生施設として拡充された。紡績や織物だけでなく，製糸業においても，寄宿舎制度は大経営を中心に整備されていき，それは第二次世界大戦後へと引き継がれていったのである。このように見ると，日本の寄宿舎制度の特徴は，20世紀後半にも残存し続けた点にあるように思われる。そしてそのことが，20世紀初頭で役割を終えた工業化初期に見られる寄宿舎一般とは異なる性質を与えていたと考えられるのである。

⑵ 自治寮としての工場寄宿舎

長期的に見た場合，日本における寄宿舎制度の変遷はどのようにとらえられるであろうか。1940年に日本労働科学研究所に入り，農村や工場の実態を調査した三瓶考子は，1957年当時まで続く寄宿舎制度の変化を５つの

9） フランス絹業における寄宿制工場については，岡野（2012）による。
10） Dublin (1979).
11） 久田（2005）54頁。

時期に分けた。まず，①「明治10年代」は，先述の富岡製糸場のように，必要に迫られて労働者を収容するために寄宿舎が設けられた時代である。②「明治20年代」に入り，労働者不足が顕在化すると，寄宿舎は遠方の労働者を収容するだけでなく，十二分に働かせるために利用されるようになり，深夜業や交替勤務のために利用されるようになった。また，労働力不足からおこる引き抜きや逃亡を防ぐために高い塀が設けられるなど，拘禁的な意味を持つようになった。その後，③ 寄宿舎の弊害が社会問題化し，1926年の改正工場法や1927年の工場附属寄宿舎規則により，寄宿舎の設備に一定の改善が見られたが，依然として拘禁的な実態もあった。しかし，④ 昭和恐慌以来，不況により女工争奪も影を潜め，深夜業も禁止されると，寄宿舎の存在理由に変化が生じた。不況から戦争に向かうなか，寄宿舎は女子労働者の修練道場化していったという。そして，⑤ 敗戦後，労働基準法によって「寄宿舎の自治」がもたらされたのである[12)]。重要なのは，寄宿舎制度が法的規制を受けながらも，④ や ⑤ の時代に重要な意味を持ち続けた点である。

1947年 4 月 7 日公布，9 月 1 日施行の労働基準法は，第10章で寄宿舎に関する規定を設けた。「寄宿舎の自治」については，第94条で「使用者は，事業の附属寄宿舎に寄宿する労働者の私生活の自由を侵してはならない。② 使用者は，寮長，室長その他寄宿舎生活の自治に必要な役員の選任に干渉してはならない。」とした。さらに事業附属寄宿規定第 4 条は，具体的に使用者がしてはならない行為を「一，外出または外泊について使用者の承諾を受けさせること　二，教育，娯楽その他の行事に参加を強制すること　三，共同の利益を害する場所および時間を除き面会の自由を制限すること」と定めた。外出や面会の制限，教育等行事への参加強制は，戦前

12）　三瓶（1957）5-7頁。

の寄宿舎制度に見られたものだが，とくに④の時代に強制力を発揮した。こうした使用者の行為を規制することで，寄宿舎の自治を確保しようとしたのである。

この「寄宿舎の自治」は，戦後労働運動が要求したものでもあった。大手の紡績業で働く労働者を中心に1946年に結成された全国繊維産業労働組合同盟（全繊同盟）は，「寄宿舎民主化運動」を展開した。その寄宿舎対策は労働働基準法案の公聴会（1946年９月）に対する意見具申から始まったという。具体的には，就業規則に寄宿舎管理大綱を明示させることのほか，工場と寄宿舎の出入り口を別々にする，室数の制限（１室６名程度，一人３畳），自治管理制にすること，その他厚生設面を完備せよといったものであった[13]。全繊同盟は，1947年２月には寄宿舎対策委員会を設置し，「寄宿舎民主化運動」を開始したのである。

これには，思わぬ追い風もあったという。総司令部労働課のマックボーイは，1947年５月，大阪商工会議所に繊維関係の労使代表を集めた席上で寄宿舎の問題点をあげ，「寄宿舎は廃止すべきだ」との意見を述べた。そのため，経営者は寄宿舎存続の必要を陳情するとともに，６月から検討を重ね，10月に段階的に民主化を進める方針を明らかにした。それは，第１段階（1947年）を自治能力養成のための指導期間，第２段階（1950年）を自治予算等による自治運営の段階，第３段階（1951年以降）を自治確立段階とするものであった[14]。

労働組合の活動が活発化するなか，福利厚生施設である寄宿舎は会社の設備であると同時に，自治寮として寮生によって自主的に運営されることになった。使用者も対応を迫られ，労使ともに「寄宿舎の自治」をめぐる

13）「スタートは寄宿舎の民主化から　寄宿舎対策20年のへんせん（上）」『月刊ゼンセン』1982年９月，15，16頁。

14）　全繊同盟史編集委員会（1965）155頁。

模索が始まったと言えよう。全繊同盟は1951年に「寄宿舎対策部」（寄対部）を設置し，「寄宿舎自治会代表者全国大会」を開いて寄宿舎民主化の徹底と体験発表の場を用意した。この大会は盛況で第12回（1963年）を数えたが，次年度からはブロックごとの代表者会議となり終了した。また，1965年３月の大幅な機構改革により，「寄宿舎対策部」は「婦人対策部」（婦対部）となり，一定の役割を終えた[15]。この間，紡績大手を中心とする繊維産業の労働運動においては，寄宿舎対策こそが女子労働者にとって最重要課題であったのである。

以上のように，戦後日本における寄宿舎制度は，自治寮となることを条件に存続した。欧米においては工業化初期に見られたものの，過去の遺物となっていた工場附属寄宿舎が，戦後日本でこれほど労使の争点となったのは，これが労働者の生活に直結する問題だったからである。そして，繊維産業のみならず，戦後発展した電機や食品産業においても寄宿舎制度が設けられたことを考えると，戦後の寄宿舎の展開にこそ，日本の寄宿舎制度の特質が表れているように思われるのである。そして，その解明には，自治寮の内実が問題となるだろう。次に，片倉工業における製糸事業と労働組合をめぐる動きを確認しよう。

2　片倉工業における製糸事業の展開

(1)　蚕糸業の復興

敗戦後，GHQ の間接統治下におかれた日本において，生糸は見返り物資の最重要品となった。そのため，GHQ は輸出糸の国内販売中止を指示し，戦時統制機関の解散や桑園減反命令の撤回などを指示した。1945年11月，農林省は蚕糸業復元要綱を決定し，1946年３月には統制会社として

15）「質的展開を余儀なくされ―寄宿舎対策20年の経緯（下）」『月刊ゼンセン』33-4，1983年４月，25-30頁。

1943年に設立された日本蚕糸製造株式会社が解散し，その管理下にあった製糸工場が元の経営に復帰した[16]。片倉をはじめとする各経営下で日本蚕糸業の復興が急がれたのである。

同時期，職員を中心に労働組合結成の動きが見られた。1946年２月21日，「片倉工業株式会社富岡製糸所労働組合」が結成され，女子労働者667人が加盟した[17]。同工場の工女数は，片倉期では1940年の786人が戦前期のピークであったから，若干少ないとはいえ，蚕糸業復興に向け多くの労働者を抱えていたことがわかる。片倉労働組合は，1946年８月６日の関東地区連合会，９月20日の片倉従業員組合総連合会結成準備会を経て，10月15日に片倉従業員組合総連合会（片倉総連）を結成し，11月25日に労働協約を締結した[18]。また，1946年12月には地区連合会に婦人部を置くことを決め，片倉総連が結成されると，総連婦人部の強化が図られた。1947年７月21日，全国から女子労働者代表が集まり，総連婦人部懇談会の結成の準備を決議した。1948年１月には婦人懇談会が規約を作り，工場給食・病気・生理休暇と労働条件などに関する調査，寄宿舎自治制の確立，女子工員の職員登用について，女子労働者の勤続年数を永続させその経済的独立を促進するための方法，工員退職金の制度などについて調査した[19]。寄宿舎自治制の確立は，女子労働者にとって重要な関心事となっていたことがわかる。

一方，同社の企業内教育機関としては，1948年３月をもって廃止された青年学校に代わり片倉学園が各工場に設置された。それは，「① 国民共通の教養を高める　② 事業場の業務につき，適切な知識を与え生産の向上

16） ただし，日本蚕糸も片倉工業も取締役社長は片倉兼太郎であった。
17） 今井（2013）56頁。
18） 楫西ほか（1955）173頁。
19） 楫西ほか（1955）184-185頁。

に資する　③将来の母性の教育として遺憾なきを期する」ものとして設置され，各種学校の認可を受けた。学年編成は本科１，２年，高等科１，２年と専攻科に分かれ，教科課程は本科では職業・国語・社会・理数・体育・家庭を，高等科では国語・社会・体育・家庭を必修としていた[20)]。

企業に私立青年学校の設立を促した1935年の青年学校令によれば，青年学校は「男女青年ニ対シ其ノ心身ヲ鍛錬シ徳性ヲ涵養スルト共ニ職業及実際生活ニ須要ナル知識ヲ授ケ以テ国民タルノ資質ヲ向上セシムルヲ目的」（第１条）とするものであったから，これを引き継いだ片倉学園が「国民共通の教養を高める」ことを目標の第一に掲げたことに不思議はない。戦後とは，福間良明が描くように，「勤労青年」が「教養」を希求した時代でもあった[21)]。先述のように，こうした教育を会社は強制することはできず，あくまでも希望者のみに提供されたが，この教育プログラムに多くの寮生が参加したのである。

⑵　合理化と二交代制の導入

1948年には，片倉工業労働組合の呼びかけで全国蚕糸労働組合連合会（全蚕労連）が結成され，他製糸でも労働運動が活発化した[22)]。もっとも，婦人懇談会が各工場に組織されると，女子労働者の労働組合活動に対する関心が高まる一方，経営合理化への対応に迫られる執行部と女子組合員との間で意見が分かれることも多くなり，婦人懇談会が二重決議機関の性格を帯びてきたという。最初にできた片倉労組婦人懇談会は1950年４月の大

20）「企業内教育のあり方―片倉学園の現状と方向」『かたくら』38，1960年６月１日。

21）福間（2017，2020）。

22）なお，全蚕労連は，1951年に全繊同盟と統合することによって繊維労働者の産業別統一を果たしたものの，総評脱退の可否をめぐり対立が生じ，1953年７月，全繊同盟を脱退して総評にとどまった。

会で解散することとなり，郡是等他製糸で婦人懇談会が組織されつつも，1954年１月に片倉労組で婦人代表者会議が開催されるまで，全蚕労連としての活動は停滞したという[23)]。

この時，片倉において経営合理化の争点は，二交代制の実施にあった。富岡製糸場が高崎労働基準監督署に提出した二交代制の深夜業許可申請によれば，「時局の経済安定方策に対処し，この難局を切り抜かんため生糸生産費の低減を図り，労使ともに最良の方策と信じ，二交代制を実施する」という[24)]。1950年に導入された二交代制は，実働７時間45分とし，５時25分から13時55分までの前番と13時55分から22時30分までの後番に労働者が分かれることによって，工場の稼働時間を延ばした。これが寄宿舎制度を前提に可能となったことは言うまでもない。

1952年には自動繰糸機が導入され，御法川式多条機から自動繰糸機への移行により所要人員はさらに減少した。この自動繰糸機による集中生産方式への切り替えにより，富岡製糸場は群馬ブロックの中心工場となったが，他方，1953年３月には全社で製糸部門を中心に男子職員239人の人員整理が発表されたため，５日間のストライキを含む「首切反対斗争」が展開され，1953年５月，希望退社とする旨の協定書が結ばれた[25)]。人員整理の対象となった男子職員を中心とする片倉労組の闘争が激しさを増す中，女子労働者を中心とする「婦人懇談会」の活動が停止していた点は確認しておく必要があるだろう。

同時期，会社側から見ると，女子寮生の自治の自覚は高まっていたようである。1954年，同社研修所の担当者は，社内報で「わが社の女子の寄宿

23） 楫西ほか（1955）184-186頁。

24） 今井（2013）61頁。こうして開始された二交代制は1982年まで続けられた。

25） 全国蚕糸労働組合連合会（1953）31-51頁。

舎生活がこの二三年来著しい進歩を見せ，他の製糸紡績に比して優位にあるように思われる」と記した。それは，「女子寮生の自治の自覚の高まり」によるものである。もっとも，多くの寮生が熱心に取り組んでいるのは，依然として「裁縫」であったから，以下の注意を促している[26)]。

> 長く寮生活をしていると，社会生活の知恵と技術即ち教養を身につけることができなくなるのである。それなのに裁縫の世界に閉じこもるのだから，進歩してゆく社会に適応する知識も能力も身につかずいつまでたっても男子と対等の地位を得ることができず，勤労女性に最も期待される今後の農村生活の封建制の打破など及びもつかないことである。大切なのは現代の社会を理解すること，家庭生活についての広い知識と技術を獲得すること，人間性を高めるゆたかな情操を育てることである。
>
> こうして寄宿舎の中に，向上の気風がみなぎると劣等感や逃避現象からくる嫉妬，羨望，排撃とか感傷，卑下のような感情がぬぐい去られて，各自が希望と期待にあふれる社会がそこに生れ，それによって働く女性としての誇も生じ，世間からも初めて尊敬の眼を以て見られるようになるのである。

ここでも，教養（＝社会生活の知恵と技術）を身に着けることが重視されている。寮生にとってそれは，男子と対等の地位を得るために必要なことであり，「勤労女性」に最も期待されるのは「農村生活の封建制の打破」であるという上記は，戦後のあたらしい価値観から，働く女性として寮生に自覚を求めている。しかし，裏を返せば，そのようにふるまわなければ

26）「寄宿舎生活」『かたくら』1954年11月10日。

劣等感にさいなまれ，逃避現象にはしり，世間からも白い目で見られるという工場労働一般の状況を示唆しているようにも思われる。

ところで，1954年に婦人懇談会に代わって実施された第１回女子組合員代表者会議では，工場給食や寄宿舎設備の改善について要望があげられた。例えば，冬季煖房については，「火の管理は寮生が責任をもち，家庭的な生活をするため各部屋毎にこたつの設置」が求められた[27)]。しかし，彼女たちのささやかな要望は，厳しい経営環境のなかで実現するのは難しかったようである。富岡製糸場では，1950年２月に冬季の二交代制対策として湯たんぽを310個購入し，1958年には75,000円の予算で火鉢の購入が計画されたが，その段階で富岡製糸場にあった炬燵は来客用８つのみであったという。また，1954年には自動繰糸機の導入に伴い扇風機が購入されているが，それは，一定の位置にとどまって作業する策緒工のためであった[28)]。各部屋にこたつや扇風機が導入されるのはもう少し先のことで，電気こたつが普及するまで待たなければならず，最低限の労働環境の整備にとどまっていたようである。それは，紡績大企業が用意した寄宿舎の立派な部屋や整った施設，教育機関に比し，明らかに見劣りするものではあったが，当時の地方農村の生活実態を反映したものでもあった。

1961年に富岡製糸場に入社した群馬県甘楽郡下仁田町出身のＫは，「驚く設備の良さ」として，「寄宿舎は押入，床の間がついて更衣室もあり明るく感じが良いし，大きな浴場はお湯がいっぱいあふれています。食事は大きな食堂で全員の人が一緒に食べられ，仕事が終ると学園があって，いろいろな学科が勉強できます。それぞれに教科書があって専門の先生が手をとって教えてくれます。運動の用具も何でも揃っていて，私の考えてい

27）　岡野（2018）63頁。
28）　岡野（2018）68-69頁。

たよりもずっとよい工場です。」と社内報に寄せた[29]。聞き取り調査でも，各部屋に火鉢がおいてあり，湯たんぽも配布され，寒い思いをしたことはないとの回想がある[30]。長い伝統を有する富岡製糸場の寄宿舎は最新の設備とは言えないものの，農村出身の新入社員が驚く程度には充実していたのである。

⑶　1960年代における製糸事業の変容

敗戦後，真っ先に復旧が図られた蚕糸業であったが，輸出先のアメリカではすでにナイロンによる代替が進み，生糸の需要は国内に向けられた。衣料需要の高まりは生糸生産を後押ししたが，繭価格も生糸価格も安定せず，厳しい合理化による生産費節減が求められた。トップ企業である片倉工業も例外ではなく，1953年９月10日に創刊された毎月刊行の社内報『かたくら』を1955年１月25日発行の第17号をもって休刊せざるを得ないほどで，それは1959年の復刊まで続いた。日本蚕糸業の衰退は明らかになっていた。

1960年，全国蚕糸労働組合連合会（全蚕労連）は，蚕糸業の衰退に伴い，日本繊維産業労働組合連合会に改称し，中小の紡績や織布，縫製などの組合づくりに乗り出していった。1962年以降，安価な外国産生糸の輸入も開始され，日本の生糸生産はさらに厳しい競争を強いられていった。片倉に次ぐ規模の郡是製糸は自動繰糸機の導入により所要人員の削減を進めるとともに，加工部門の拡充により1962年から採用人員を急増させ，工場作業職としての高卒女子採用が本格化し，1967年には高卒者が1,000人を超え，３分の２を占めるようになっていった[31]。これに対し，片倉工業は依然と

29）『かたくら』（東日本版）48，1961年７月15日。
30）富岡市の聞き取りによる。
31）榎（2019b）306頁。

して中卒者を中心とした製糸事業の継続を図っていた。

片倉工業は，1961年１月１日から製糸事業所名を従来の「製糸所」から「工場」に改めることになった[32]。これは，「製糸の採算経営の達成」を目標とする取組の一環であった。６月15日からは，会社業績向上のため実働８時間とすることが労使で合意され，労働時間の延長が図られた[33]。また，この年には中卒女子の就職希望者の減少により，養成工の募集難が生じ，同社21工場で約600人を採用する予定であったにもかかわらず，実際は400人の採用にとどまった[34]。採用計画のない工場もあるなか，富岡製糸場（男子96人，女子305人）は同社で最も多い61人を採用した。しかしながら，同社製糸事業は本格的に合理化を進め，1958年から1968年にかけての10年間で生糸生産のあり方は大きく変わっていったのである。

片倉工業では，1958年に製糸工場が22工場（5,097釜運転）であったのに対し，68年には14工場（1,528釜）にまで集約されたが，生糸生産量は58年の約39,000俵から68年の約34,000俵へと87％を維持した。この間，自動繰糸機は標準（RM）型からデラックス（HR）型に更新しつつあり，繰糸一人当たり繰糸量は58年の2.1kgから68年の6.7kgへと３倍強となっていた。生産糸の５％が輸出され，他は国内消費で，織物の経糸に利用され，全国的に需要があったが，丹後，北陸地方で圧倒的に多く消費されていた[35]。

もっとも，片倉工業も，製糸から合成繊維や衣料品生産部門へと進出を始めていた。片倉工業は，アメリカ最大のフルファッションメーカーであるハドソン靴下株式会社との共同出資によって1954年に片倉ハドソン靴下

32）『かたくら』43，1961年２月１日。

33）『かたくら』47，1961年６月１日。この時，同社の主な事業所は35あり，18の製糸工場のほか，蚕種，製作，加工，研究製作，出張所などがあった。

34）「充足割合６割強」『かたくら』45，1961年４月１日。

35）「わが社の現状〈5〉製糸部門」『かたくら』100，1968年11月20日。

表１　片倉工業学卒女子採用状況

入社年月	目　標	実　績	達成率
1964年３月卒	424	386	91.0％
1965年	490	433	88.4％
1966年	697	663	95.1％
1967年	479	424	88.5％
1968年	1,064	754	70.9％
５年合計	3,154	2,660	84.3％

出所）『かたくら』99号，1968年９月20日。

株式会社を設立（1962年片倉ハドソン㈱に社名変更）し，大宮工場で婦人靴下「キャロン」ブランドの製造を行った[36]。さらに1959年には片倉キャロンメリヤス株式会社を発足させ，大宮に新工場を建設して生産を開始した[37]。1968年１月１月，片倉工業は片倉ハドソンを吸収合併し，企業規模の拡大強化を図っていったのである。

製糸事業の合理化が進む中，表１のように1964年の新規学卒女子（中卒）の採用は抑えられたが，採用実績はさらに下回っていた。そのため，女子従業員の減少から従来の学園運営が困難になる工場が出てきたため，1966年度からは新しい学園制度が発足し，「内容的制度的に実態に即したものに脱皮」したという[38]。具体的には，本科・高等科を４年制から３年制（余力のあるものは４年）にし，家政学園として家政科を主体とした学園運営を行うことができるようにした。日給者で新制度の学園を卒業し所定基準に達した者に対しては，３年制８円，４年制10円（改訂前は５円），家政学園５円以内の学歴給部分が基本給に加算されることになったのである。学科

36）『かたくら』19，1954年２月20日。
37）『かたくら』29，1959年12月３日。
38）「新学園制度の発足」『かたくら』85，1966年５月15日。

よりも，女子労働者が希望する洋裁や編物といった家政技術の習得を重視した教育制度を用意し，出席率を上げるため金銭的なインセンティブを高めたのであろう。

もっともそれは，高校進学をあきらめて入社した寮生に葛藤を生じさせていた。1969年，社内報の新春文芸欄に掲載された富岡工場のMが投稿した「十八才の私」は，その迷いを率直に表現している。

> 公立高校，この言葉は今でもやはり，私にはあこがれの言葉である。どんなに行きたかったか知れない。片倉に入社した後も，一般勤務にしてもらって，定時制高校に進学しようかと思ったことも何度かあった。そのたびにまた考えさせられた。片倉には学園の制度があり本人の努力次第で人並みのことは身につけられる。授業料は無料であり，通学する心配もない。そうだ学園でしっかりがんばろうと，心に決めながらまた迷ったりもした[39]。

女子の高校進学率が上昇した1960年代末には，中卒で働きながら「人並みの事」を身に着けられる学園の魅力は，富岡工場においても低下していたように思われる。

以上のように，片倉工業の製糸事業は敗戦後，多くの製糸経営が廃業を迫られるなか，二交代制を実施し，自動繰糸機の導入によって生産性を高めることで経営を存続させた。工場によっては人員整理や配置転換の対象となったが，養蚕県である群馬県に位置する富岡製糸場は大幅な人員減を伴いつつも，同社生糸生産の重要な拠点の一つとして，中卒女子を主体とする生糸生産の最前線にありつづけたと言えよう。富岡製糸場における

39）『かたくら』101，1969年1月1日。

1968年度の生産状況を確認しておこう。女子労働者252人（うち繰糸工152人）が2交代制で繰糸作業に従事し，繰糸機は自働繰糸機（ニッサンRM式5セット，HR式9セット）であった。その生産糸は21中237,266kg，28中26,075kg，31中24,703kgで，21中が中心であった[40]。織物用の太糸を生産する工場は，最盛期に比し，3分の1以下の人員となっていたが，こうした生産体制における寄宿舎生活はどのようなものだったのだろうか。

3　1968年の寄宿舎生活

(1)「寮管理日誌」と女子寮管理係

「寮管理日誌」として綴られた用紙の中央には「管理日誌　片倉富岡製糸所」とあったが，1966年3月以降は単に「寮管理日誌」となっている。「寮管理日誌」のフォーマットは一定で，最上段に日付，曜日，天候が記され，その横に押印欄が設けられている。押印するのは，所長，課長，人事，係の4人で，記述者は女子寮の管理係である。工場長ではなく所長となっているのは，以前の名残であろう。1968年3月以降，「所長」欄が「工場長」に変更された用紙が使用されている。記録されるのは「寄宿舎関係」として「人事」，「営繕」，「その他」の3点，「外来者」について「氏名」，「年齢」，「用件」，「食事宿泊等」，最後に「その他」欄が設けられていた。

ところで，日誌を綴じた文書の表紙は「寮管理日誌」であったが，1967年11月以降は「寄宿舎管理日誌」あるいは「寄宿舎日誌」と書かれている[41]。戦後「寄宿舎の自治」が求められ，自治寮として運営された寄宿舎

40）今井（2013）60頁。

41）具体的には，「片倉工業富岡工場　寄宿舎管理日誌　昭和四十二年十一月」「昭和四十三年三月　寄宿舎日誌　片倉工業富岡工場」「昭和四十三年五月三十日起　寄宿舎日誌」「昭和四十三年九月二十一日　寄宿舎管理日誌　片倉

を寮と呼ぶことが一般化した。全社的に利用されたと推定される用紙に「寮管理日誌」とあるのはそのためであろう。本稿では，便宜上，資料引用の際は「寮管理日誌」（日付）で表記することとする。なお，この用紙は寮管理係が自ら印刷していた[42)]。

1968年の富岡製糸場では，女子は鏑寮10室，浅間寮16室，妙義寮16室に入居し，男子寮は３室が使われていた[43)]。いずれも戦前期から利用されてきた寄宿舎である。ただし，鏑寮は1963年に改築されていた。改築以前の鏑寮は，中廊下式で，廊下を隔てて北側の部屋と南側の部屋とに分かれていた。１室の広さは８～18畳で各階に10室あり，北側の部屋が狭く，南側の部屋が広くなっていた。1953年に外側の戸を障子からガラス戸に変更したが，それ以外は当初の構造を残していた。1963年の改造工事では，中廊下式を北側片廊下式に改造し，各室は18畳（または15畳）と８畳（または６畳）と２畳の取次で構成され，各階に５室ずつとなった。同時期，15～18畳間に40ワット，６～８畳間に20ワット，廊下に20ワットの蛍光灯が設置されたという[44)]。「寮管理日誌」によれば，榛名寮は，こたつや扇風機といった季節家電の収納場所として利用されたほか[45)]，３月には布団店が来所して綿入れ作業を行ったり，臨時の宿泊施設として活用されたりしていた。９月にはバレー部の選手が合宿で榛名５号室に入寮し[46)]，12月にはこの部屋の障子張りを行っている[47)]。

工業富岡工場」となっている。

42）「寮管理日誌」（1968年３月５日）。

43）推定根拠は，「蚊取線香各部屋に配る50箱／妙16ヶ，浅16ヶ，鏑10ヶ，病２，男子寮３，その他３」「寮管理日誌」（７月22日）より。

44）以上，寄宿舎の改築過程については，山田（2020）。

45）「コタツ全部榛名寮に来す（浅間寮）（鏑寮）」「寮管理日誌」（４月12日）。

46）「寮管理日誌」（９月23日）。

47）「寮管理日誌」（12月14日）。

女子寮の管理係は，30歳代の女性が担当したようである。例えば，富岡製糸場の聞き取りの記録によれば，1938年生まれで1954年に中学を卒業して就職したＵは15年間富岡工場に在職したのち，1969年11月から1975年５月まで片倉工業青梅工場の女子寮管理係として勤務した。その後，メリヤスの実習を受け，小千谷工場製品係として勤務したのち，1978年５月から1987年３月の操業休止まで再び富岡工場で勤務したという[48)]。興味深いことに，Ｕは後述の労働組合主催のリンゴ狩りの前に，他の３人とともに下見を行っていた[49)]。1968年当時，何らかの役員をしていたと考えられるが，1969年に富岡製糸場を辞めた理由は，「片倉労組富岡工場支部長と食い違いがあった」ためという[50)]。女子寮の管理者は，このような経歴の者も含み，寮生として勤務経験のある者から選ばれたのであろう。

「寮管理日誌」によれば，女子寮管理に従事しているのはＡ，Ｋ，Ｓの３名で，寮管理日誌の記述者はおおむねＫで，係印もＫとなっている。５月17日，Ｓは食堂へ転職しているが，彼女は当直室，事務所２階研修室，講堂，廊下，面会室の掃除を日課とし，来客接待などを担当するほか，洗濯やアイロンかけ，衿布や枕カバーを縫ったり，大量の雑巾を縫ったりしていた。こうした作業も寮の運営には不可欠で，担当者が必要だったようである。「営繕」の記録を見ると，蛍光灯やこたつの故障は日常茶飯事で，その都度電気屋を呼んで修理してもらい，蒸気パイプの不具合や簡単な修理は工場内で対応した。こうした不備を見つけ，速やかに修理を依頼するのも寮管理係の仕事であった。

同社では，寮管理者の講習も実施され，他工場の管理係との交流もあった。例えば，３月には他工場から来た管理係に寮を案内している[51)]。また，

48）富岡市の聞き取り調査による。

49）「寮管理日誌」（10月13日）。

50）富岡市の聞き取り調査による。

11月にKは社員講習会（寮管理講習）のため出張している[52]。詳細が判明する第2回寮管理講習会（1965年11月18日～20日）について見てみよう。片倉健保熱海保養所で開催された講習会の参加事業所は，製糸部門14，加工研究部門7，蚕種部門5の計26事業所で，教育係，寮管理係，室長等31名が参加した。「寮生個人の生活指導について」や「寮管理が円満に行われるために」必要なことが議論された。前者では，例えば，「寮生の交友，風紀問題」については，健全な男女交際の場を持たせ，スポーツ，レクリエーション等を通して，他事業所や他所の従業員と交流を図ることも必要とされた。「余暇の健全な活用」については，定期的な体育関係の行事とともに，講演会，講習会も随時開催することが重要とされた。「寮生の経済生活の指導」については，予算生活の習慣を確立して無駄遣いをはぶいて，貯蓄を奨励し，将来一家の主婦として健全な家庭生活が営めるよう指導する事が確認された。後者の寮管理について出席者から出された希望は，寮管理係の職務が精神労働にあることを理解してほしいといったものや，清掃，雑務に時間と精力を取られないよう寮生の生活指導や身の上相談役としての立場を理解してほしいといったものがあった[53]。これらはいずれも，寮管理係が直面していた状況を示唆している。

以下，一年間の寄宿舎生活を概観したうえで，「休日」「退寮者」「外来者」について分析を進めることにしよう。

(2) 寄宿舎生活の一年

まず，年間を通した寄宿舎生活の大まかな流れを確認しておこう[54]。新

51）「寮管理日誌」（3月24日）。
52）「寮管理日誌」（11月11-13日）。
53）『かたくら』83，1966年1月1日。
54）以下，日付は「寮管理日誌」のものである。

年は，１月６日から仕事が始まったが，数人の寮生が戻ってこなかった。一方，所定入場者には「映画券」が配布された。10日，中卒者の選考が実施され，来所した32人にお茶や昼食を準備した。学園は22日から開始され，25日にはピアノが到着した。

２月には工場長の交代があった。３日，退任する江島工場長は，花器14個，剣山10個，ハサミ１個を寮に寄贈した。学園には華道の先生も来ていたから，寮生に必要なものだったのだろう。５日には，新旧工場長の挨拶があった。なお，「寮管理日誌」には，１月29日まで江島所長の印があるが，それ以降，所長欄は空欄のままであったから，工場長が寮管理日誌に目を通すことはなくなったようである。

３月は10日㈰午前中に講堂で「組合定期大会」があり，午後には「自治寮定期大会」が開催された。16日午後11時より「自治委員会」が開催され，翌17日㈰には午前８時半から「第１回職場委員会」が開催された。このように，労働組合や自治会の活動も記録されている。ところで，２月12日には，高校生３人が一足早く鏑寮へ入寮し，３月11日に残りの高校生３人と合わせて６人が正式入社し，鏑寮に入寮した。３月20日には，66名が入社し，新入社員は計72人となった。高校生の採用も見られるが，中卒者が中心であったことがわかる。翌21日に「新入生入所式」を開催し，終了後に事務所前で記念撮影し，春季旅行の参加者調査が行われ，食堂で新入社員全員の挨拶があった。31日には，1967（昭和42）年度学園卒業式が行われた。

４月には，まず２日に春の健康診断を実施し，７～９日には慰安旅行が敢行され，11日午後４時からは新入生の「懇談会」が開かれ，12日には「組合三役会」があった。なお，15日，寮生２人が10時半に帰寮したため注意を行っている。21日には自治寮主催で新入社員歓迎会が開催されたが，３名が外出したままで帰寮しないため，その父母が駆け付け，面会室

に宿泊した。翌22日６時に浅間寮の１人は作業に復帰したが，鏑寮の２人は午前９時ごろ戻ってきたという。なお工場は，19日から一直勤務であったが，26日から二交代勤務に戻った。この日，講堂では「組合本部ヨリオルグ」が来ていた。

５月２日，夏用の半袖作業衣が全員に配布された。作業衣は貸与され，２年間を過ぎると返還の義務がなくなったが，洗い替え用などに購入する場合もあった。系列の縫製工場から購入していた作業衣は，1957年以降，東京都練馬区の睦商事に注文するようになったという[55]。このときも「（請求額97,140円）睦商事」とあるから，睦商事から調達したのであろう。ところで，28日，寮生３人が朝食後体調を崩して休み，翌日には新たに２人加わり計５人が病室で休む事態となった[56]。30日に女子寮の消毒をしており，何らかの感染症が疑われる。

６月には，教婦講習生11人が６日から13日にかけて来所し，二号館に宿泊した。富岡製糸場は同社生糸生産の主要工場であったから，ここで教婦の講習が実施されていたことがわかる[57]。このほか，繭の乾燥作業のため長野から10人が来所し，新潟や地元から集められ，11日は乾燥男子計32人が宿泊していた。また，14日には埼玉から「教師」約50人が来所し，和裁室で茶接待を行っている。こうした外来者に対し宿泊用の寝具を用意したり，お茶や食事の接待をしたりするのも寮管理係の仕事であった。

７月１日，「新繭繰糸祝い」のため午後６時半から全員そろって食堂で会食を行った。８日，学園第二教室で男子高校生の入社試験が実施された。15日から扇風機の使用が開始され，20日から学園は夏休みとなった。寮管理係は学園の出席率を確認し，出席率に応じた賞品を用意し，出席率

55）　難波（2020）77，78頁。

56）　富岡製糸場の医療体制については，二谷（2020）参照。

57）　富岡製糸場における教婦の変遷については，差波（2020）参照。

を高めるのもその業務の一環であった。12日には，講堂で保健所の胃レントゲン受診が実施された。28日には「新入社員父兄会」が開かれ，30日には和裁室で「防犯講演」を行った。

８月１日，「執行委員会」が開催されている。お盆休み前の13日には講堂で「盆供養」を行い，龍光寺海源寺墓参した。従来の映画券代りに配られたのは「キャロン七分袖」であった。翌14日から16日までＡ班が盆休みに入り，交代の16日はＢ班の前番が勤務し，17日から19日までＢ班が盆休みに入った。夏休みに当たるこの時期，中学生の工場見学を受け入れている。19日には午前中に47人，午後44人の工場見学があり，牛乳や食事の提供を行った。20日には下仁田中の36人が来所し，21日には小沢中40人，磐戸中47人，甘木一中からの見学があった。なお，23日には，「新入生職業補導会」を和裁室で実施した。

９月２日，二学期の「家庭寮」が始まった。「家庭寮」とは，数人ずつで実際に生活しながら，予算管理から買い物，炊事，洗濯といった家事を一通りこなす場で，結婚退職前の希望者が対象となった。８日，高崎支部ボイラー係55人が来所し，和裁室で茶接待にあたった。９日には，消灯時間についての話し合いや「執行委員会」が開催された。15日には来春中卒者のための工場見学会が開催された。24日，関東電気バレーコートで庭球試合を行った。

10月は，17日には講堂で秋期健康診断が行われ，午後の学園が休みとなった。28日には「募集会議」があった。30日には組合行事のリンゴ狩りがあり，13日には４人がその下見を行っている。

11月は，１日に「来春中卒父兄32名」が来所し，食事の接待が行われ，６日には高校生の見学があった。７日には，「日本人形作り」を娯楽室で開催し，先生３人が来所し，寮生45人が参加した。後述の学園祭（展示会）に展示するためと思われる。24日は公休日であったが，希望者のみ４時間

働いたという[58]。

12月になると，２日に「執行委員会」，３日に「労協」があった。20日には，預金払戻の集計作業を行っている。22日にクリスマス忘年会が開催された。年末には，妙義寮の１室で5,000円が紛失する事件が起きた[59]。後日，同室と話合いを持ったが解決せず，日誌の欄外に「注意事項　外来者で週番室を利用し物品の販売集金等のため立入する人があれば注意願いたい」との書き込みがなされ，外来者への注意を促している[60]。後述のように，寮舎には実に多くの外来者が出入りしていたのである。

(3)　休日のイベント

休日は，定休日としての日曜日に加え，特定休日として元旦（１月１日），天皇誕生日（４月29日），文化の日（11月３日），勤労感謝の日（11月23日），労働祭（５月１日），年末年始に５日程度，その他工場ごとの特別休日年５日以内と定められていた[61]。規定通りの休日が設定されていることがわかるが，ここで注目したいのは，表２に示すイベントの多さである。

年１回の慰安旅行は全社的に実施された。富岡では，春の旅行としてバス４台（群馬バス）で伊豆下田へ出かけた。旅行参加者199人には，ジュース，夏みかん，キャラメル，いかの４品が配られた。旅行委員会が組織され，旅行バスの編成や部屋割りが決められた。こうした旅行は秋に実施される場合もあった[62]。一方，この年の秋には，10月30日（特定休日）に組合

58）「寮管理日誌」（11月24日）。
59）「寮管理日誌」（12月１日）。
60）「寮管理日誌」（12月５日）。
61）「従業員は5200名余」『かたくら』48，1961年７月15日。
62）例えば，1966年は10月31日の早朝に出発して１泊２日で伊東に向かい，男子59人，女子199人が参加した。参加者には，前日にパン，ジュース，りんご，梨，キャラメルが支給された（「寮管理日誌」1966年10月31日）。1969年

表２　富岡製糸場における主な休日イベント（1968年）

日　付	曜日	内　　容
２月25日	日	前橋にて卓球大会
３月３日	日	関東地区卓球大会
３月31日	日	昭和42年度学園卒業式
４月７日	日	春季旅行伊豆下田参加者199人／バス4台（群馬バス）～9日
５月１日	水	ソフトボール大会全員参加
５月12日	日	新入生バレー大会
５月19日	日	製糸協会バレー大会
６月16日	日	宝映にて就職者激励大会
７月28日	日	新入社員父兄会
10月20日	日	社内バレーボール大会
10月30日	水	組合行事にて（特定休日）リンゴ狩参加者191人
11月３日	日	関東地区バレー大会／バス1台（52人参加）
11月17日	日	第八回学園祭（21回展示会）／父兄会
12月22日	日	忘年会クリスマス

出所）「寮管理日誌」1968年より。

行事として開催されたリンゴ狩りに191人が参加した。

新入社員に対するイベントも多い。４月にはまず，自治寮主催の新入社員歓迎会が開かれた。５月には新入生バレー大会が催され，親睦を深めた。６月には就職者激励大会が開かれ，講堂では学校の先生と事業主との懇談会が設けられた。７月には新入社員父兄会が開催され，総務課全員が出社して手伝っている。

５月１日のメーデーには，全員が白ブラウスで参加したこともあったようだが[63]，この年は全員参加のソフトボール大会が実施された。ソフトボ

も10月27，28日に甲斐昇仙峡へ慰安旅行に出かけ，女173人，男41人が参加した（「寮管理日誌」1969年10月27日）。

63）富岡市による聞き取り調査による。

ールのほかにも，卓球やバレーボールが盛んに実施され，地域の大会等にも出場していた。11月には関東地区バレー大会に52人が参加するため，バス１台を用意した[64)]。

10月６日には寮のイベントではないものの寮生25人が「北橘青年」と大峰山ハイキングに出かけたことが記録されている。これ以前，７月には「12時ヨリ30分間北橘農村青年Ａ組寮務員自治委員と懇談す（和裁室にて）」とあり，交流があったことがわかる[65)]。

11月17日（日）には第８回学園祭（第21回展示会）が開催された。前日には，和裁用着物立を工務に依頼して５本作ってもらい，男子全員で紅白幕張り，万国旗張りを行い，ステージ照明，レコードマイクは倉持電器に依頼するなど準備した。当日は，楽団演奏や八木節，民謡舞踊が披露され盛会であった。翌日は，学園祭後片付けで，湯呑150個を倉庫へしまうなどした。なお，この様子は，社内報である『かたくら』に通信員発の記事（「第８回学園祭（父兄会）を開催」）が掲載されている。

> 女子社員の父兄二百余名が参加した中で，坂根学園長（工場長）より，ご家庭の日ごろのご支援に謝意及び工場の運営方針等を述べて一層の理解と協力についてお願いした後，学園生徒，父兄代表よりそれぞれ答辞があり，式典を終了しました。
>
> 各教室に展示された生徒の作品を見て回り，演芸会，女子寮生によるバザー，社製品の廉価販売等盛り沢山なスケジュールを消化し，最後に食堂で懇親会食を行って工場，父兄，生徒が一体となった楽しい有意義な一日を過ごしました[66)]。

64）「寮管理日誌」（11月３日）。

65）「寮管理日誌」（７月15日）。

こうした取り組みは，江原工場長時代から継続されていた。同工場は，「会社―従業員―家庭の三者一体感の協力体制」を構築し，「地元就職郷土の発展」を旗印に募集活動を行い，従業員の定着性の向上と新規採用に目覚ましい成果を上げたという[67]。

12月22日には午後４時より「クリスマス忘年会」が開催されたが，寮ではこの準備に追われていた。７日，クリスマス行事についての打ち合わせが行われ，14日，１人100円の会費を集め，15日の公休日にクリスマス用品250個を購入し，16，17日にはプレゼントの包装を実施した。さらに，19日にクリスマスクラッカー，帽子を購入し，24日午後２時から男子全員と寮役員で飾付を行い，「クリスマス忘年会」が開催された。

以上のように，公休日にも何らかのイベントが多数用意され，寮管理係がその多くにかかわっていたことがわかる。ただし，1969年の「寮管理日誌」からは公休日である日曜日の記述自体がなくなっており，完全な休日として認識されたものと思われる。

⑷ 「人事」における退寮者の動向

1968年１月から12月の間に退寮した寮生は31人で，約半数の16人が「結婚のため」退寮していた。残りは，「自己退寮」あるいは単に「退寮」と記されている。この退寮者は退職者とみなせるが，その理由が結婚であるか自己都合であるかは重要な意味を持つ[68]。退職金の計算において，自己都合乗率が設定されていたためである。

66）『かたくら』101，1969年１月１日。

67）『かたくら』99，1967年１月１日。

68）例えば，1969年の日誌には退職者と明記され，12月８日には「退寮，通勤となる」と特記された寮生もいるため，特に記載のない場合，退寮者＝退職者とみなす。

表３　1968年の退寮者数　（人）

月	退寮者	結婚のため
１月	2	2
２月	2	2
３月	2	2
４月	6	3
５月	2	0
６月	1	0
７月	3	3
８月	1	1
９月	3	0
10月	5	3
11月	1	0
12月	3	0
合計	31	16

出所）「寮管理日誌」1968年より。

同社労働組合は1960年の退職金規定の改訂交渉において，退職金基準額を現行のほぼ２倍とするよう要求したほか，自己都合乗率について勤続10年以上（現行は勤続20年以上）を100とすること，受給資格者を勤続１年以上（現行は通常の場合３年）のものにすること，賃金改定の都度支給率を反映させるスライドなどを要求していた。女子の10年勤続は男子の定年にも等しいものであるから自己都合乗率は10年以上を100とすべきと主張する労組に対し，会社は女子の10年での退職を定年退職に準ずると見ることに反対であること，女子の結婚退職にはすでに満額支給を行っていること，同業他社でも20年が普通であり全国的にも10年を取っているところはまれであることから，自己都合乗率の変更に反対した。結局，中央労働委員会の斡旋を受け，女子５年で30,200円（現行24,000円）の支給額増となったが，その他の要求に関する改訂は見送られた[69]。自己都合で退職する場合，勤

続年数が20年未満のときには1割から6割を年数に応じて減額されたが，結婚退職の場合には全額が支給されたのである。とはいえ，わかりにくい制度であることは確かで，退社した寮生3人が退職金について相談に訪れることもあった[70]。

退寮者は4月と10月に若干多いものの，年間を通して確認できる。寮の部屋が判明する23人のうち過半は鏑寮の者で，比較的年令の高い者と推察されるが，5月には妙義寮に入ったばかりの「新入生」の退寮も確認される。6月には「新入生」が荷物をまとめて帰ると言い出したものの，話し合いで解決した[71]。これも寮管理係の重要な仕事であった。

(5)「外来者」

戦前の工場附属寄宿舎が工場内の閉じた空間であったのに対し，1960年代には多くの外来者が出入りしていた点は特筆すべきであろう。「寮管理日誌」に記載された外来者は大きく3種類ある。第一に，先述の工場関係者で，他工場の教婦が講習に来たり，職員が会議に訪れたりするほか，工事業者や原料員等が男子寮に宿泊する機会も多かった。第二に，寮生に面会に来る親族等で，「寮管理日誌」が想定する「外来者」にあたる。寮生に面会に来る親族らは，個人名のほか「母」「父」「兄」といった属性で記され，用件によっては宿泊する場合もあった。例えば，3月20日には新入社員の付添として多くの「父兄」が寮舎を訪れ，4月3日には節句のため面会人が多数来た。退寮の際に兄が荷物の引き取りに来る事例や病気にな

69)『かたくら』48，1961年7月15日。この問題はさらに10年を経て，1970年に退職金規程が改訂されたが，ここでも自己都合と結婚退職は差が設けられた。

70)「寮管理日誌」(5月13日)。

71)「寮管理日誌」(6月20日)。

った寮生の付添に母が来た事例もある[72]。ここで注目したいのは，第三の「外来者」，すなわち寮生に対する販売や集金のために来る業者たちである。

園田靴店は，富岡商店会長として最も頻繁に寮舎を訪ねた。新入生が入る３月には運動靴やスリッパを販売するため来所し，会社にバレーボール１個を寄贈した[73]。５月にはサンダル類の販売を行い，９月にはバレー部の運動靴を持参したほか，定期的に販売や集金にやってきた。寮生の履物需要を一手に引き受けていたのであろう。面会室にいろいろな靴を並べて販売したという[74]。茂木クリーニングも定期的に集荷や配達を行っていた。横山書店は，雑誌を持参したり，集金に訪れたりと頻繁に出入りしている業者の一つである。寮生たちが何を読んでいたのかは極めて興味深いが，持参した婦人雑誌でこの年確認できるのは『女性自身』のみである。1966年６月17日には「婦生」「婦倶」の記載が見られるから，『婦人生活』や『婦人倶楽部』も購読されていたのであろう[75]。

競合する店は激しくサービス競争を行っていたことも確認できる。例えば，サンケイ新聞は，湯桶サービスを全員に実施し[76]，岡田新聞店は部屋ごとにポリバケツを配布した[77]。最も多いのは呉服店や洋品店による衣料品販売で，伊勢崎富善（和洋品），富岡まるまつ洋品店，本庄まるふじ，吉野呉服店，大内商事（呉服），澤口商店（洋品），富岡佐々木洋品店といった店が複数回，販売を実施している。このほか，アミヤ薬局（資生堂化粧

72） この年，寮生が盲腸で入院した事例が４件あり，うち２件で母が来所し，その他２件で付添用の布団貸出を行っている。

73） 「寮管理日誌」（３月20日）。

74） 富岡市の聞き取り調査による。

75） 「寮管理日誌」（1966年６月17日）。

76） 「寮務日誌」（２月６日）。

77） 「寮務日誌」（７月13日）。

品），高田食堂，石地時計店，太閤堂毛糸店，大宮ドック（ココアコーヒー類）といった店も寮を訪れている。定期的に，給料日の25日かその翌日にやってくるのは，ジューキ，リッカー，蛇の目ミシンの集金，牛乳店，ヤクルトの集金で，さらに群馬銀行，西群馬信用組合，郵便局が保険積立金の集金に毎月来ていることも確認される。多くの寮生は，給料から天引きされる会社預金を行っていたため，帰省を前に払戻作業を行うのも寮管理係の仕事であった点は先述のとおりである。1960年代はじめ，富岡工場入社４年目のＩは，「マネービル」に関心を持ち，有利な会社預金を選択し，「私も入社以来毎月千円づつ天引預金しています。もうこれが６万円にもなりました。これに退職金を足せばお嫁入りの支度も何とか家のお世話にならなくてもすみそうです」と書いている[78]。こうした会社預金とは別に，郵便局等の積立を個人で行っているものも多かったようである。

実際のところ，寮生がどの程度貯蓄し，どの程度何を購入していたのか，その詳細はわからない。ただし，高額の商品は月賦で購入することも多かったようで，勤務経験者の座談会では石地時計店で給料３か月分の時計を月賦で購入したという回想もある[79]。そのため，学園で洋裁を習得した寮生が，退社時のためにミシンを月賦で購入した可能性は高いだろう。ミシンの国内販売数は1969年を頂点とし緩やかに低下するが，寮生は家庭生活の必需品となっていたミシンを自ら購入することができたといえよう[80]。もちろん，寮生の買い物は，自分自身のためだけではなかった。盆と暮れの帰省時には，家族への土産購入で近隣の店が賑わったといい，例えば，父に肌着，母にショール，姉妹に化粧品，弟に靴下といった具合で

78）『かたくら』（東日本版）48，1961年７月15日。

79）富岡市による聞き取り調査による。

80）戦後日本でのミシンの普及と内職にミシンを踏んだ女性たちについては，ゴードン（2013）279-323頁参照。

あった[81)]。

寮生に自社製品である「キヤロンメリヤス」や「キヤロンセーター」の販売を行っている点は特筆すべきであろう。同社はお盆や年末に自社製品を贈るだけでなく，衣料品事業部門の強化とともに，本社から各工場にキヤロンブランドの製品販売を指示していた。例えば，６月には本社よりキヤロンセーター注文に担当者が来所して講堂で販売を行い，107,100円を売り上げ，７月12日に会計に払い込まれた[82)]。６月29日には本社斡旋のキャロンストッキングを販売し，340足22,100円を売り上げた[83)]。11月にも，講堂でキヤロンメリヤスを販売し，160,000円を計上した[84)]。先述のように，寮管理係は「寮生の経済生活の指導」も担っていたが，貯蓄を奨励するだけでなく，自社製品の購入を促し，外来者の販売に便宜を図っていた。寄宿舎生活は，「将来一家の主婦として健全な家庭生活が営めるよう」配慮されていたが，消費者の育成にも一役買っていたのである。

おわりに

敗戦後，労働運動の興隆に伴い実践された寄宿舎民主化運動は，寄宿舎の自治を実現するうえで重要な役割を果たした。本稿は1960年代後半の自治寮の内実を富岡製糸場の「寮管理日誌」から見てきた。「寮管理日誌」は生産現場である工場とも教育機関である学園とも異なる視点から，女子労働者の生活を記録した貴重な資料と言えよう。そこから見えてきたのは，彼女たちが工場で生糸生産に従事する労働者であると同時に，地域の商店や自社製品の重要な顧客となっていた点である。少なくとも，自身が

81） 富岡市による聞き取り調査による。
82）「寮管理日誌」（６月27日）。
83）「寮管理日誌」（６月29日）。
84）「寮管理日誌」（11月30日）。

稼いだ収入を自分の意志で処理することが可能であった点は，指摘しておく必要があるだろう。

一般に，1960年代初頭には高校進学率の上昇から中卒者の採用難が指摘されたものの，富岡製糸場は近隣の中学校と連携し，家庭との連携を深めることで人材を確保していた。教育や余暇の提供を含む寄宿舎制度は，女子労働者を確保する手段として，より一層重視されていたことがわかる。もっとも，彼女たちは1950年代に会社側が期待したように，「農村生活の封建制の打破」を担う「勤労女性」として自治意識を高めつつも，寄宿舎生活では裁縫に没頭しがちであった。同様に，労働組合に加入しつつも，労働運動にあまり興味を示さなかった。繊維労連東京都支部書記長は，寄宿舎制度の問題を取り上げ，「「若い娘をあずかっているのだから万一のことがあったら困る」というまさに100年の伝統をもつ資本の口実を，案外，口実ばかりとは思わない若い女子労働者の意識の変革も，同時に労働組合としてとりくまなければならない」と嘆いた[85]。

しかし，彼女たちは自身の生活に根差した理想を追求し，高度成長期の消費生活を享受していたように思われる。サンドラ・シャールは聞き取り調査から，製糸労働者として働いた人たちの〈声〉に耳を傾け，彼女らが自身の経験を「哀史」としては認識していないことを描出し，彼女たちが直面していた農村の現実に注意を促した[86]。1960年代後半の寄宿舎生活からも，それがうかがえるのである。

付記　本研究はJSPS科研費19K01789の助成を受けたものである。

85）　佐藤（1968）32頁。

86）　シャール（2020）。

参考文献

今井幹夫（2013）「富岡製糸場の経営実態に関する一考察―特に原時代の後期と片倉時代の全期について」『平成24年度富岡製糸場総合研究センター報告書』富岡市，43-70頁。

榎一江（2008）『近代製糸業の雇用と経営』吉川弘文館。

榎一江（2019a）「IALHI 第49回ミラノ大会について」『大原社会問題研究所雑誌』725，100頁。

榎一江（2019b）「製糸工女と衣料生産」『女性労働の日本史―古代から現代まで』296-309頁。

榎一江（2020）「富岡製糸場の女性労働環境」『富岡製糸場女性労働環境等研究委員会報告書』富岡市，11-23頁。

岡野雅枝（2012）「旧官営富岡製糸場の設立当初の労働環境に関する研究―19世紀フランスの寄宿制工場との比較を中心に」『平成23年度富岡製糸場総合研究センター報告書』35-73頁。

岡野雅枝（2018）「昭和20年代後半から30年代初頭の片倉製糸工場の女性労働環境について―組合機関紙に見る女性労働者の要望―」『平成29年度富岡製糸場創業研究センター報告書』富岡市，55-72頁。

楫西光速・帯刀貞代・古島敏雄・小口賢三（1955）『製糸労働者の歴史』岩波書店

清川雪彦（1989）「製糸業における広義の熟練労働力育成と労務管理の意義」『経済研究』40-4。

腰塚徳司（2017）「富岡製糸場の寄宿舎の変遷について―埋蔵文化財発掘調査の成果を受けて」『平成28年度富岡製糸場総合研究センター報告書』富岡市，39-59頁。

ゴードン，アンドルー／大島かおり訳（2013）『ミシンと日本の近代―消費者の創出』みすず書房。

差波亜紀子（2020）「富岡製糸場における『教婦』」『富岡製糸場女性労働環境等研究委員会報告書』富岡市，103-119頁。

佐藤洋輔（1968）「寄宿舎制度と労務管理」『賃金と社会保障』労働旬報社，27-32頁。

三瓶孝子（1957）「寄宿舎制度の今昔」労働省労働基準局『労働基準』社団法人日本労務研究会，5-7 頁。

シャール，サンドラ（2020）『「女工哀史」を再考する―失われた女性の声を求めて』京都大学出版会。

隅谷三喜男（1975）『日本賃労働史論』東京大学出版会。

全国蚕糸労働組合連合会（1953）『全蚕労連の歩み（第五輯）1952年事業報告』。

全繊同盟史編集委員会（1965）『全繊同盟史』第２巻，全国繊維産業労働組合同盟。
成田一江（2000）「寄宿舎制度と製糸工女―郡是の事例（1920-1921）」『比較社会文化研究』8 。
難波知子（2020）「富岡製糸場における女子作業衣の変遷」『富岡製糸場女性労働環境等研究委員会報告書』富岡市，51-86頁。
久田俊夫（2005）「ローウェル工場群の寄宿舎制度―利用目的の変質」『経済経営論集』13-1，45-56頁。
藤村聡・山路秀俊（2005）「戦前期の企業内教育：貿易商社兼松の寄宿舎制度」『国民経済雑誌』191-2，63-84頁。
福間良明（2017）『「働く青年」と教養の戦後史―「人生雑誌」と読者のゆくえ』筑摩選書。
福間良明（2020）『「勤労青年」の教養文化史』岩波書店。
二谷智子（2020）「富岡製糸場での疾病と医療体制」『富岡製糸場女性労働環境等研究委員会報告書』富岡市，87-102頁。
松村敏（1992）『戦間期日本蚕糸業史研究―片倉製糸を中心に』東京大学出版会。
山田智子（2020）「富岡製糸場における女子寄宿舎の建築構成の変遷と女性労働者の生活環境―鏑寮，浅間寮・妙義寮を中心に」『富岡製糸場女性労働環境等研究委員会報告書』富岡市，25-50頁。
Dublin, Thomas (1979), Women at Work : The Transformation of Work and Community *in Lowell, Massachusetts, 1826–1860*, Columbia University Press.